

民衆の笑い・民衆の姿：現代ペルーのエスニシティ表象

著者	佐々木 直美
出版者	法政大学比較経済研究所
雑誌名	比較経済研究所ワーキングペーパー
巻	114
ページ	1-11
発行年	2003-04-21
URL	http://hdl.handle.net/10114/3883

比較経済研究所プロジェクト「植民地主義の再検討」(2002年6月6日発表)

テーマ「民衆の笑い・民衆の姿：現代ペルーのエスニシティ表象」

法政大学 第一教養部 佐々木 直美

ペルーではいわゆる都市化に伴い、山岳部の農村から人口が海岸部の都市、特に首都リマを目指してあふれ出した。白人支配層が闊歩していたリマにも、故郷を出てきた貧しいアンデス農民たちの数が増え、優雅なりマの雰囲気は一転した。当然、人が動けば文化も付いてくる。このような状況をペルー研究者たちは「リマのアンデス化」あるいは「チョロ化」と呼び、特に1990年代から注目してきた。本発表では、この「チョロ」をキーワードに現代ペルーにおけるエスニシティの表象について報告したい。

《チョロとは》

チョロということばの語源は諸説あり明らかではないが、最も古い資料の一つは、16世紀後半から17世紀のはじめに記され植民地の記録で、それによるとチョロはある種のイヌを指すことばであったと考えられる。それが明確な時期は不明だが、人間に対しても使われるようになった¹。当初はメスティソ(白人とインディオの混血)またはネグロ(黒人)とインディオ女性との混血を指していたものが、18世紀になるとインディオとほぼ同義語に使われている例もあるが、次第にメスティソとインディオ女性の子に限定して使うことが定着された²。現代では、スペイン王立アカデミー発行のスペイン語辞書によると白人とインディオの混血、つまりメスティソと同義語とも説明されているが、実際にはペルーでは人種的・文化的要素が複雑に絡んだ概念である。

都市における農村からの移住者や出稼ぎ者などの比重が高まり、特にリマにおいて存在感を増す彼らを前にして伝統的都市支配層や住人は嫌悪を込めて彼らをチョロと呼んだ。それは、人種的混血であることへの嫌悪ではない。ペルー人社会学者ヌヘントは、「チョロとは都市のインディオ」つまり「場違いな者」であると述べた。このことばどおり、ペルーにおいて、チョロとは、メスティソではなくインディオや農民の同義語として使われることが多い。しかし、そのインディオや農民が都市へ大量に流れ込んで依頼、殊に「都市のインディオ」の意味でチョロが使われだしたと理解できる。

そして、伝統的都市支配層の視点からすれば「都市のインディオ」とは「場違い」であ

り支配層の価値基準から逸脱した存在、嫌悪の対象となった。90年代以降「チョロ化」の名の下に注目されている存在は、このようなアンデス農村を故郷に持ちながら、特にリマに居住する人々とその二世、三世のことである。

《チョロを笑う》

私は、チョロが蔑称であることを1990年にペルーに滞在したときのある出来事によって知った。当時ホームステイしていた家族の18歳の女性と冗談を交わしていたとき、ペルーでは「かわいい」を意味する「chula」を私は言い間違えて彼女に対して「chola(cholo)の女性形」と言ってしまい、彼女を怒らせてしまった。白人系混血であることを強く意識している彼女にとっては、大変な侮辱だったようである。

都市支配層にとって軽蔑の対象であるチョロ/チョラを笑いのネタにするコメディアンも数多く登場した³。たとえばペルーの人気コメディアン、ホルヘ・ベナビデスは1999年自らがテレビ番組内で演じる新たなキャラクターとしてチョラを選んだ。「パイサナ・ハシクタ」の名で作り出した新キャラクターの誕生に関してわたしのインタビューに対してベナビデスは次ぎのように述べた。

ラ・パイサナ・ハシクタは、私たちの国の現実を思い起こさせるのです。地方の人々を首都へと押し出す現実です。特に、非識字者で仕事にありつける可能性など微塵もない人の現実です。車に近寄っては施しをねだり、救いを請い、車の窓を磨きに来る農村出身の女性たちから、特にわたしはこのキャラクターの着想を得ました。

ベナビデスは、「現実」ということを繰り返す。もともとベナビデスは物まねタレントであることから、彼は演じる対象の特徴を的確に捉えそれを誇張することで滑稽さを生みだすことを得意としている。ハシクタの場合も、不潔でみすぼらしい格好をした無知で無骨な田舎女性がリマで生き残る術を見につけていく「現実」のパロディである。このことは、他のチョラを名乗るキャラクターたちが、或る意味でチョロ/チョラの理想や憧れを体現してきたことと対極をなす。

見る側は、白人系混血の男性のベナビデスが演じるインディオ系女性チョラの「本物らしさ」や誇張された滑稽な言動を笑う。ハシクタは、笑いの対象つまり笑われるチョラとして演出されているのである。

《チョロが笑わせる》

一方、「笑われるチョロ」ではなく「笑わせるチョロ」を演じるコメディアンも存在する。特に目立った活動をしているのが、インカ帝国の首都であったクスコ出身の男性、フアン・ウバルド・ワマンが演じるキャラクター、チョロ・シリロ（以下シリロと表記）である。シリロは、一般にチョロと呼ばれる都市の人々や農村住民に人気がある。つまり、シリロに共感する人々に支持されている。

シリロの活動はペルーでは珍しく、決まった相手とコンビを組んで二人の会話によって笑わせるという芸風である。つまり日本の漫才と同じで、漫才作者の秋田實が漫才を定義したとおり基本的には「二人の人間の立ち話」⁴によって笑いを生み出す。

コンビの相手は、ポエタ・デ・ラ・カイエ（通りの詩人：以下ポエタと表記）を名乗る黒人系の男性である。ポエタは、海岸都市・「ネグロ」（黒人）をそのキャラクターの特性として備えており、山岳部農村・インディオを特徴とするシリロとは対比的である。しかし、他方では、両者ともに白人が権力を握る国内で従属的な立場にあり、差別や貧困といった不満や問題を共有する関係にある。

したがって二人の世間話風の芸、つまり漫才は、以上のような関係を反映してエスニシティに関する話題（ネタ）も多い。以下に二人の漫才テキストの中から3つの漫才の類型⁵を取り出して、どのようにエスニシティがネタに使われているかを具体的に見ていこう。

《チョ・シリロとポエタ・デ・ラ・カイエの漫才》

言葉遊び

ポエタ：羽の生えた^{ブランコ}白は？

シリロ：羽の生えた^{ブランコ}白は天使だ

ポエタ：^{ネグロ}黒に羽が生えたら？

シリロ：コウモリ だな

ポエタ：プールのなかの^{ブランコ}白は？

シリロ：水泳選手

ポエタ：プールの中の^{ネグロ}黒は？

シリロ：アザラシ

ポエタ：そのとおり ジャングルの中で短パンをはいた^{ブランコ}白人？

シリロ：狩人

ポエタ：で、ジャングルで短パンをはいた^{ネグロ}黒人は？

シリロ：食人種

ポエタ：いや本当さ、お前は真実を言っているのさ

シリロ：そう

ポエタ：ブランコに^(カメラ)カマラといえは？

シリロ：観光客

ポエタ：じゃあ^{ネグロ}黒に^(タイヤのチューブ)カマラは？

シリロ：タイヤだ

ポエタ：^{ブランコ}白人が牛乳を飲むと？

シリロ：おとなしくなって学校に行く

ポエタ：^{ネグロ}黒人牛乳を飲むと？

シリロ：トイレへ直行！

ポエタ：赤ん坊にタルカムパウダーをつけてやるとどうなる？

シリロ：ああ、そりゃおとなしくご機嫌になって笑うよ

ポエタ：^{ネグロ}黒人につけると？

シリロ：すぐに泣き出し叫ぶさ 唐揚げにされると思うからな

ポエタ：もしブランコがマフラーをしていたらどう見える？

シリロ：風邪ひきだな

ポエタ：^{ネグロ}黒人にマフラーをしたら？

シリロ：コンドルみたいだ

ポエタ：こうゆうことが問題なんだよ、チョロ

シリロ：もちろん 本当にそうだな

「^{ブランコ}白」は善、「^{ネグロ}黒」は悪に直結するというペルー社会の「真実」をポエタが立証するため、シリロになぞなぞを仕掛けていく。シリロはネグロに同情し、「いやいやそうは思わないよ、パパリンド、^{ネグロ}黒いのがみんな悪くて、^{ブランコ}白いのがみんな良いとは俺は思わないよ」と、人種差別的な善悪を言葉では否定しながらも、ポエタが出す問いには聞き手の予想以上に差別的な答えで「真実」を立証する。しかもなぞなぞ問答の途中で挟まれるシリロの呟きが、「^{ネグロ}黒」=悪 という「本音」を漏らすことになり更なる笑いを誘う。二人の問答は、色のシンボリックな対比から始まるが、それが生物そして人間の「ブランコ」と「ネグロ」

それぞれに対する連想ゲームへと移行し、シリロが連想した答えがネグロにとって極めて侮蔑的なものである分、その誇張が笑いを生む。そして結果的に二人の問答は、人種差別的な善／悪・美／醜・近代／野蛮の区別を強化しながら再生産する。

この問答は、ペルー市民としての平等という「建前」の裏に隠蔽された差別的認識と社会状況を憚ることなく公言し、普段は閉じ込められた「本音」を解放することによって笑いを誘っている。これは、王を笑う道化の役割が秩序を一時的に脅すことにあり、決して完全に崩壊させることはなく、むしろショックを与えることによって更にその秩序を強化することにあるのと同様である⁶。したがって、ネグロに対する偏見は、シリロとポエタが作り出す笑いによって温存されたままである。

しかし、二人の話題がシリロのエスニシティにまで関わってくると状況は異なる。このテーマは二人の悪態の競い合いに頻繁に登場する。

悪態

二人が最初に発売した漫才カセットは、それぞれの紹介から始まるが、それが互いの悪態の付き合いになっている。

ナレーター：ピパ・プロダクションが紹介する、とっておきの芸人チョロ・シリロ！

ポエタ：芸能界では、よくいる哀れなグアナコ（アンデスに生息するラクダ科動物）として知られています。

チョロ：ちょっと待て、親愛なる友、ゴリラのコンドーム、耳のある
コカ・コーラ、色の無い黒人、色さえお前の色は持ってないぞ。
哀れなグアナコ(ラクダ科の動物、田舎者、間抜け)とはどうゆうことだ！お前は間違っている。俺はビクーナ(ラクダ科動物：毛は最高級)だ。

ポエタ：もちろん、はっきりさせるのは良いことだが、俺は見たままを
言っているんだよ、いいかチョリート(チョロの縮小形)、いいか
チョリートまあ赦せよ。

シリロ：でも俺をチョロ呼ばわりするな。俺をチョロ呼ばわりするな。
お前に気安くチョロと呼ばれる覚えはないぞ。 どうゆうことだ。

ポエタ：俺は見たままを言っているだけだよ。

シリロ：なんてことだ！

ポエタ：だってお前セラーノ（山岳部出身の人）じゃないか。

シリロ：そうだよ、俺はセラーノだよ。

ポエタ：セラーノそのものだ。

シリロ：誇りを持ってね、いつでも、お好きなように、どこからでもさ！

お前のお袋！

ポエタ：おい、まだ俺にからもうって言うのか「お前のお袋」って、何が言いたい？

シリロ：お前のお袋は...背が低い

ポエタ：よし、いいぞ、チョロ、仲たがいしないために。

シリロ：じゃあ、なんでお前は俺を馬鹿にするんだ？グアナコを知りもせずに、俺のことを哀れなグアナコなんて呼びやがって。

ポエタ：いや、いや、いや、だって俺にはお前がセラーノに見えるし、お前はセラーノで正真証明のチーズじゃないか。

シリロ：それでもいいさ、でも、そのへんのチーズじゃないぞ。見てのとおり俺は上等のチーズ、高級チーズだ。ライベ社のチーズだ。

ポエタ：お前がライベのチーズなら俺はなんだ？

シリロ：お前なんかタールだよ。

ポエタによって仕掛けられた「セラーノ」であることへの「悪態」に対して、シリロはその一部、自己の文化的背景については肯定しつつ、しかしそれは「高級」であることによってポエタの言葉を否定する。そして、「ネグロ」であるポエタには「質」など無いと仄めかし、ポエタを貶めることで「悪態」合戦に「オチ」をつける。このように二人の言い合いでは常にシリロがポエタより一枚上手であることが示されるが、話題がエスニシティであるため、シリロとポエタの「勝負」は必然的に個人を越えてそれぞれが代表する社会グループ「チョロ」対「ネグロ」の関係へスライドされる。シリロは「セラーノ」への偏見を意外にも否定せず「訂正」する、観客は自分の予想とシリロの狡知の間に生じた「ズレ」に思わず笑いが出る。

この遣り取りで注意を引く点はもう一つ、「チョロ」ということばの使われ方である。シリロはポエタから「チョリート」（チョロに縮小辞が付いたかたち）と呼ばれることを拒否する。ポエタから「チョロ」と呼ばれるほど彼とは親しくない、というのが理由だ。ここ

で思い出さなければいけないのは、この遣り取りは最初のカセットの冒頭であるということだ。カセットでは見ず知らずの二人が偶然リマで出会ったという設定になっている。「チョロ」という呼び名は多義的で、親しい間柄では愛称としても用いられるが、それ以外ではアンデス先住民とその子孫に対する蔑称として用いられてきた歴史があり、「チョロ」という言葉に不快感を示す人も少なくない⁸。カセット冒頭にあるポエタの「チョロ」発言に対するシリロの「拒否」はこれを表わしている。しかし、しばらくして二人の間に「対話」が成立し始めると、シリロは「チョロ」と呼ばれることを厭わなくなる。そしてなにより思い出していただきたい、シリロの芸名は「チョロ・シリロ」なのである。シリロは芸名の由来についてわたしに語った。

人はチョロであると言うことを恥だと思っていた。でも自分たち自身のものについて恥じるのなんておかしいと私は思ったのさ、私たちは文化的に豊かな国なんだ。時にはチョロということばはある種の侮辱だったけど、チョロやセラーノたちは実際に現在ペルーの経済力になったことを時間と歴史と伴に示した。彼らは大企業や大きな産業の経営者だ。それで私は私たち自身のものについて再評価したかったんだ。もちろんチョロと呼ぶのは少し間違っていてインカであるべきだけどね、だってチョロっていうのは混血のことだから。でも、地方出身者やセラーノに対してはいつもチョロって言うてきたからね。とにかくわたしはチョロ・シリロを通じてセラーノたちについて人が言うてきたことを再評価したかったんだ。

チョロ・シリロはその誕生の根本から自己肯定を基本としたキャラクターとして設定されている。「チョロ」をはじめ「セラーノ」や「チーズ」「アンデス特有の生き物」といったアンデス山地出身者のアイデンティティに関わる「他者」が浴びせる揶揄的表現を「再評価」し、揶揄から脱却する狡知を持つチョロとしてシリロは演じられている。このことは、偏見を温存するネグロのネタと異なる点である。ネグロのネタでは、暴露された「本音」と「建前」のズレ、あるいはチョロによる誇張が笑いを誘うが、チョロがネタになると、チョロを侮辱しようとする者に対して一步譲って打ち負かすという小気味良さが、聴衆の笑い時には彼らの声援や賛同を伴って消費される。というのも「漫才」の台詞にもあるように二人の客の多くはチョロと呼ばれる人々だからである。

ポエタ：真面目な話、俺が大統領になったらペルーの問題は麻薬じゃない。

シリロ：と言うと？

ポエタ：ペルーの問題はテロリズムではない。ペルーの問題は高い失業率でもない。ペルーの問題はこのどれでもない。ペルーの問題は何か？ それは、こいつら厄介どもさ、お袋に誓って言うよ。だからもし、俺が大統領になった日には、神様に誓って、検問所と料金所に警官を置いて一人のセラーノも理由はなんであれリマに入れないようにしてやる、本気だぞ。

(中略)

シリロ：でもお前が分かってないことはナ、ネグロ、このカセットを聴いているてる大多数はセラーノだってことさ。彼らは街でお前を見かけたら今にめちゃくちゃにやっちまうぞ。見とけよ。

シリロとポエタの「悪態」合戦は常にチョロの反撃によって「オチ」がつきシリロの方に軍配が上がる。しかし、チョロの狡猾さによって爆笑が生じたとしても、それはシリロが意図する「チョロの再評価」を必ずしも意味しない。自らが育った文化や出自に対して誇りを持つというシリロの信念は、ポエタからの侮辱や軽蔑に臆することなく悪態を吐き相手を打ち負かすシリロの姿として表現される。その際、自らへの誇りが「他者」を貶めることによって得られる優越に転じている。その結果、シリロによって聴衆にもたらされる「チョロの再評価」とは、粗野で、ずる賢く油断できないチョロ像である。

狡猾

リマ市内には、様々な盗品が安価で売られている市場がある。スリや偽札による詐欺が横行する治安の悪いその一帯で損することなくうまく遣って行くのは至難の技だ。しかし、その手ごろな値段と豊富な品揃えは低所得者たちを引き寄せ、シリロとポエタが交わす日常会話のテーマにもものぼる。

シリロ：この間カチーナ(盗品市場として知られている)に行ったんだ。

ポエタ：それで？

シリロ：ラジオを買うと、誰にも盗まれないように丁寧に包んでくれたんだ。で、家に帰って開けてみると中身は煉瓦じゃないか。

ポエタ：アーツまんまと遣られたなチョロ。

シリロ：そうなんだ。でも、俺もバカじゃないさ。ちゃんと偽札で払っておいたよ。

互いが「ネグロ」、「チョロ」と呼び合い、時にはそれぞれのエスニシティを代表してネタを披露するため、直接話題がエスニシティでなくてもポエタとシリロの個人的なキャラクターは常にネグロとチョロの集団的イメージへと結び付けられる。シリロを演じるワマンの意図がシリロを通じた「チョロの再評価」を促すことであるなら、シリロ像が集団としての「チョロ」に直結されるのはワマンの思惑通りである。

しかし、このネタに現れるチョロ像もずる賢さや抜け目のなさを提示しており、シリロが望んだように積極的な再評価につながったと言うより、無知で哀れなチョロ像からずる賢いチョロ像へと変化したとみなされる。

《チョロ・ブーム》

ペルーには次のような言い回しがある。「神よ、我を解放し給え。金のある黒人、権力のあるチョロから」。白人支配層はこれほどチョロが権力を握ることを危惧してきた。しかし、都市大衆と化したチョロは、その勢力に乗って権力へと近づいてきた。1990年代から「有効票」を持つ多数派を形成したチョロの影響は、単純に数が支配する領域でその威力を発揮した。たとえば、視聴率に左右されるテレビ番組である。

近年では、ペルー各地、特に山岳部農村の伝統的祝祭や音楽、風景を紹介する番組や、チョロが主な生産・消費を担う「チチャ音楽」そして大衆層の視聴者参加型トーク番組が目立ってきた。この流れの中で、チョロを演じるコメディアンたちの人気も高まり、それまでは街の広場や地方の小さな催事場で巡業をしていた芸人たちにも、主演テレビ番組の枠が与えられた。このような傾向に対し、伝統的支配者層はそれらの番組を「俗悪」と批判し、ケーブル・テレビへと移行している。

しかし、数という大衆の力を決して無視できない選挙の場において、大衆の支持を集める「チョロ」は2000年の大統領および国会議員選挙を前にブームとなった。現大統領のアレハンドロ・トレドは選挙キャンペーン中、インカ王のイメージを纏いパフォーマンスを行ったほか、セラーノやチョロということもイメージ戦術の中に盛り込んでいた。国会議員選挙に目を移すと、二つの政治グループから3名の「チョロ性」をアピールする芸能人、UPPからチョラ・エネルヒアとチャト・グラドスそしてFREPPAPからチョロ・シリ

口が候補に立ち、「チョロ候補」が話題になった。結果は三人とも落選であったが、政治の場におけるチョロ演出のブームは、多数の国民が「復権」を切望している証と、一部の知識人から解釈された⁹。

《おわりに》

チョロということばは、蔑称としての古い歴史を持つ呼称であるが故に、私のような余所者が使用するには躊躇される。しかし以上の考察から、現在チョロが多数のペルー国民にとって「再評価」や「復権」の対象あるいは象徴となっていることも明らかとなった。実際、チョロを自称する人々も一般に存在する。自らをチョロと認める人々は決まったように言う：「ペルー人はみんなチョロだ」。

つまりペルー総チョロ化の発想である。彼らは、チョロとしての特権を主張するのではなく、ペルー社会の多様性を包括したうえで、全国民が共有できるアイデンティティとしてチョロを捉えなおしている。

1970年代からテレビでチョロを演じ続けてきたコメディアン、トゥリョ・ロサは「日系ペルー人もチョロと呼べるか」と問うわたしに次のように答えた。

はい、わたしならそう呼びます。彼らはみんなチョロです。この国は多元主義で、多様な色の国です。中国系、日系、チョリート、白人、グリーンゴ（白人の俗称）もいます。何でもありですよ。他の国には無い混ざり合いです。そして彼らはチョロなのです。（中略）フジモリだってチョロであることから逃れられません。彼の祖先は日本人、私の祖先がスペイン人だったのと同じように。

しかし、ペルー総チョロ化論は否定・疎外されてきた立場を肯定・包括へと転換させる試みとも理解できる。また一方では、エスニシティによる差別や偏見をこの建前で隠蔽してしまう危険もある。笑われるチョロと笑いを作り出すチョロの立場の違いはあっても、民衆の笑いに生きるチョロたちが行ったことは、制度的平等のもとに潜在化され黙認されてきた「インディオ」に関する厳しい「現実」と「真実」の暴露であったと言えるだろう。

¹ GARCILASO DE LA VEGA, *Comentarios Reales de los Incas*, Biblioteca Ayacucho, Caracas, 1976, p.266. (牛島信明訳『インカ皇統記2』大航海時代叢書エクストラ・シリーズ2、1986年、岩波書店)。POMA DE AYALA Felipe Guamán, *Nueva Crónica y Buen Gobierno*, Biblioteca Ayacucho, Venezuela, 1980. *El Primer Nueva Crónica y Buen Gobierno*, Siglo Veintiuno, México, 1980.

² VARALLANOS José, *El Cholo y el Perú*, Imprenta López, Buenos Aires, 1962, pp.21-36.

VILCAPOMA José Carlos, *El Retorno de Los Incas: De Manco Cápac a Pachacútec*, Universidad Nacional Agraria La Molina, Lima, 2002, pp.294-297.

³ 詳しくは拙著「民衆文化における〈チョロ〉像の変遷」法政大学教養部紀要第115号、2001年、pp.29 - 50。

⁴ 秋田實『私は漫才作者』文芸春秋、1975。

⁵ 井上は漫才を8つに分類しているが、本稿ではそれを参考にし、そのうちの3つを取り上げた。井上宏『まんざい - 大阪の笑い - 』世界思想社、1981年

⁶ 井上宏『まんざい - 大阪の笑い - 』世界思想社、1981年、pp.33 - 34。

⁷ チョロ・シリロとポエタの漫才テキストにおけるケチュア語の発言は斜体で示す。

⁸ 「チョロ」という呼び名は多義的であり、しかも愛称と蔑称という一見矛盾する意味を孕んでいるため感情的に敏感である。この呼び名とそれに対する人々の認識については、紙幅の制限上ここで詳細に述べることはできないが、別の機会に考察する準備はある。

⁹ 「ラ・レプブリカ」紙のホーム・ページ (www.larepublica.com.pe/diario/politica.htm) 掲載の記事「政治家は何のために仮装するか」参照 (アクセス日 2001年6月12日)。